

## 在日留学生の自己概念と適応との関係についての検討

徐 光 興<sup>1)</sup>

### 問題と目的

自己概念とは自己についての概念的認知構造の全体のことである。すなわち、自分自身の像に対する認知の仕方とその認知の内容を自己概念と呼ぶことができる。

今日の心理学では、自我・自己概念の研究は、多くなっている。特に、自己概念の重要な側面である「同一性」をとりあげても、パーソナリティや発達心理学において、個人の最も一般的な適応の属性の一つとして考えられるようになってきている。その測定方法は、たとえば発達の、社会的行動、心理臨床の研究を基礎とした、自我同一性尺度、SD法、Q分類法(Block, 1961)などの質問紙調査、現実自己と理想自己との差異得点法、M-Y(本明・ギルフォート)やY-G(矢田・キルフォード)性格検査法、「重要な他者」との人間関係によって自己を特徴づける知覚ゲシュタルトによる方法、またはロールシャッハ・テスト、TAT、人物描画法などの投影法などがある。多くの研究結果は、個人の発達や適応の程度が自己概念や自我同一性と強く関係していることを指摘している。ところが、異文化環境において留学生の自己概念と適応との関係のあり方について考えてみると、以下の三つの可能性が推測される。

- (1) 留学生の自己概念と適応とは全く無関係である。
- (2) 留学生の自己概念と適応とは一応関係があるが、その両者の関係は強く密接に結びつくものではなく、留学生の適応により強い影響を及ぼす別の要因が存在する。
- (3) 異文化環境においても、留学生の自己概念と適応とは強く相関している。すなわち、留学生の適応変容では自己概念が重要な役割を果たしている。

以上の三つの可能性に対し、何らかの実証的研究に基づいた検討が必要である。しかし、これまでも自我・自己の概念の研究は多いが、留学生の自己概念と適応の関係についての検討はほとんど取り上げられなかった。

留学生の適応に関する研究は、これまでもさまざまな観点から行われてきた。中でも世界各国から多くの留学生を受け入れてきたアメリカでは、研究成果の蓄積が最も多い。その中でChurch(1982)は、1948年以降に発表された約300編の研究を概観し、大きく3つの領域に分けている。まず、1番目の領域は、留学生が抱えている適応上の困難点を明らかにする研究であり、これらは制度面での改善や留学生に対する援助・サポートを効果的に行うことを目的としている。2番目の領域は適応過程を曲線や位相モデルで示す記述的アプローチである。例えば、Lysgaard(1955)のU型曲線仮説やGullahorn & Gullahorn(1963)のW型曲線仮説がある。また、適応過程の段階説としてはAdler(1975)の位相モデルが現在でも広く引用されている。3番目の領域では、年齢や出身国、あるいは言語の堪能さといった留学生の個人要因、また社会的相互作用の質や量などの状況的要因、そして人格的要因が適応とどのような関係にあるかが検討されている。

他方、在日留学生の異文化適応研究については、たとえば、個人の内的要因が適応とどのような関係があるかについて、日本や日本人に対する留学生のイメージを測定し、イメージのよさを適応の良さとみなしていたり(岩男・萩原, 1988)、異文化接触時のストレスの度合いを測定しストレスに対する対処の程度を適応の指標としていたり(モイヤー, 1987)、環境、状況に対する本人の受容度や満足度をその適応度と考えていたり(山本, 1986; 上原, 1988)、また留学生のインタビューにより異文化接触後どのように自分が変化したと思うかという形で自己意識が記録されたものがある(高井, 1989)。

しかし、異文化接触時またはその後の自己同一性や自己概念と適応との関係を探ることを第一目的とした研究は現在のところ見当たらない。

そこで、留学生の自己概念と適応との関係についての実証的研究が必要となってくるだろう。しかし、なぜ留学生の適応研究について彼らの自己概念を焦点に当てて、研究しなければならないのか。

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程)

留学生は自分の母国の文化環境を離れ、それまでの発達過程で準備してきた「自己概念」を、異文化に適応していく新たな自己、理想自己と対応、照合させていく。そのことによって、自分をとりまく留学先国の社会状況の中で自己を実現していくための将来の方向を模索し、吟味し、選択し、自己決定する過程が留学生の異文化適応課題としての自己同一性の探索と確立の過程であるといえるだろう。

ところが、留学生の自己概念と留学生の同一性問題とはどういう関係があるのだろうか。ここでは自我心理学、とくにエリクソン (Erikson, 1959) の人間発達漸成論、人生周期 (life cycle) や発達危機 (development crisis) などの理論をとりあげたい。

エリクソンのいう「同一性」という用語について、その時々主体性、自己概念、存在証明、自覚、自己価値などいろいろの言葉があてはめられている。この同一性は、理論上、自己の単一性、連続性、不変性、独自性の感覚を意味するのみではなく、一定の対象 (その人格) や一定の集団およびその成員との間で、是認された役割の達成、共通の価値観の共有を介して得られる適応感、安定感に基礎づけられた自尊感情 (self-esteem) および肯定的な自己像 (self-image) をも意味している。自己概念 (self-concept) は、自我 (ego) のいろいろな面を含むものであり、自己の行動、能力、性質に関する態度、判断、価値の全体についての知覚 (意識) と評価とを含むものと考えられる。この概念をめぐるいくつかの立場から研究が行われている。Ciaccio (1971) は、これらを、①理論的重要性を指摘するもの、②理論および臨床概念的有用性を指摘するもの、③エリクソンの理論に基づく評価尺度、適応尺度などを用いて理論の妥当性を調べるもの、④漸成原理それ自体のコースを研究するものに分類している。

この概念は、今日の在日留学生の異文化適応研究にとっても価値があると考えられる。留学生の異文化適応の過程において、異文化環境の中で現実自己 (real-self) と理想自己 (ideal-self) との間に葛藤が見られ、不安、不適応に巻き込まれることがしばしばある。そこで、留学生の適応への援助は、まず彼らの異文化環境 (留学先) における自我・自己の成長への援助からはじめるのがよいのではないかと考えている。また、実際に援助関係、ソーシャル・サポートやカウンセリング経験により、留学生の自己に成長変容が起こることや適応状態が改善することも知られている (Taft, 1977; Klineberg & Hull, 1979)。

そこで本研究は、留学生の人格、情緒、社会的適応と自己概念との関係、その援助方法を検討することを目的

とする。すなわち、まず①自己概念の中で現実自己と理想自己の差異を測定する。次に②現実自己と理想自己の一致度と適応度との相関関係を分析し、さらに③自己概念の測定結果と他の性格検査や質問紙調査の結果との関連性について検討を加える。本研究では、以下の二点の仮説が検討される。

仮説1：異文化環境 (日本) において、留学生の自己概念 (現実自己と理想自己の一致度) と適応とは正の相関をもつ。すなわち、留学生のこの一致度が高いほど、適応的傾向を示し、自己一致度が低い場合には、適応度も低くなっている。

仮説2：自己概念の測定による適応の測度は、他の人格適応検査の測度と相関を有する。

## 研究方法

**被験者** アジア系の留学生65名 (中国大陸出身45名、台湾出身12名、韓国出身7名、香港1名) で、すべて日本の国立大学の大学院生あるいは研究生 (理科系41名、文科系24名)。被調査者の内訳は、男性38名 (58.5%)、女性27名 (41.5%)、平均年齢は29歳であり、結婚状況は未婚者53名、既婚者12名、日本における滞在期間の平均値は31.2ヵ月であった。日本語能力は、上級レベル46名で全体の70.8%、中級以上のレベル19名 (29.2%) であった。

### 手続き

①小集団 (5~6人) で指定の場所に集合してもらい、質問調査票などを配布し、その場で記入してもらい、回収した。合計53人 (81.5%) であった。

②大学や民間の留学生相談室へのカウンセリングや心理相談のために来室した留学生に個別に調査を実施した。合計12人 (18.5%) であった。

③調査時期：1995年9月から1996年8月迄。

### 調査内容の構成

①自己概念の測定 ロジャーズ (1954) は臨床的場面において、治療過程の進行に伴って適応の改善が見られると共に、自己概念も変容することを示して、心理療法において自己概念が果たす大きな役割を指摘し、また、自己および自己概念を操作的に定義づけて、それを「現実知覚された自己」 (現実自己, present-self) と「理想的にそうありたいと願っている自己」 (理想自己, ideal-self) によって構成された概念であると考えた。このことは、同一個人の中に多くの異なった自己知覚が存在することを意味する。個人は自分自身の自己知覚を「私に似ていない」ということから「私に似ている」に至る主観的尺度の連続線上に位置づけることができる。こうして得られた自己像が現実自己である。同時に、個

Table 1. 各カテゴリーに分類する枚数

	← 最も似ていない				最も似ている →				
各カテゴリー値	1	2	3	4	5	6	7	8	9
カード分類枚数	5	8	12	16	18	16	12	8	5

人は「私が最もなりたくないもの」から「私が最もなりたくないもの」に至る価値の連続線上に自己知覚を位置づけることができる。このような操作的手続きによって得られる自己像が理想自己である。現実自己と理想自己との隔たりがある場合に、さまざまな適応問題をおこす。現実自己と理想自己に差異がある場合は、一般的に自己認知に不一致または分離があることを示し、その差異の程度を不一致の度合いとして相関係数  $r$  の数値で操作的に示すことができる。

ここでは、すでに構造化されたものとして Block, J. (1961) の作成したカリフォルニア Q セット (形式 III) に準拠することとし、被験者 (留学生) の日本語の堪能さなどの要因を考えた上で、Block (1961) の 100 項目を日本語に訳したもの (濱田, 1981) を用いて調査を行った。

②自己一致度の測定 被験者はアト・ランダムにきった 100 枚の記述文カードを 1 枚ずつ読み、現実自己の姿に「最もよく似ていない」ものから「最もよく似ている」ものに、9 つのカテゴリーに分類する。カテゴリーに分類する項目数は、Table 1 のように準正規分布するように分類の枚数が決められている。

次に個人の理想像、すなわち自分の心の中で最もそうなりたい (あるいはそうでありたい) と思っている姿を考えて、100 枚のカードを「最もなりたくない」ものから、「最もなりたくない」ものまでの 9 つのカテゴリーに分類する。分類された位置に割り当てられたカテゴリー値が、その質問に対するその人の得点となる。各項目 (カード) の得点は、各個人ごとに与えられた 100 個の質問の中で比較される。

Block (1961) より、現実自己と理想自己との得点 (カテゴリー値) の差  $d$  および  $d^2$  とその  $d^2$  の和 ( $\sum d^2$ ) を算出し、現実自己と理想自己との一致度 (分離度)、そして相関係数  $r$  の値を求める (Block によれば

$$r = 1 - \frac{\sum d^2}{864} \text{ である。}$$

③自己一致度と適応度との相関の測定 Block (1961) は、Q 分類法で自己概念を測定した上に、適応点を算出する工夫をしている。100 枚のカードの中に適応点項目が 26 項目あり、その半分は不適応内容の項目

(例: 人生に生き甲斐を感じていない) である。前者の 13 個の項目で「私に似ている」と反応した場合 (カテゴリー値 6 ~ 9) は 1 個につき 1 点の不適応得点になる。また残りの 13 項目は適応した内容の項目 (例: 頼りになり、責任感がある) で、これらの項目に「私は似ていない」と否定的に答えた場合 (カテゴリー値 4 ~ 1) も同様に不適応得点として数えられる。つまり、不適応得点が高いほど不適応傾向を示すと考えられる。こうした上で、自己一致度と適応度との相関係数を測定する。

④ Q 分類法の測定結果と Y-G 性格検査の測定結果との比較 Q 分類法による自己一致度と適応度の測定結果の妥当性を検討するために、Q 分類法の測定を受けたすべての留学生に対し、一週間後に、Y-G (矢田部ギルフォード) 性格検査を施行した。検査の結果については、特に D, C, I, N, O, CO の 6 因子を情緒、社会的一般に関する「適応-不適応」因子群としてとりあげる。さらに、Y-G 検査のプロフィール判定による 5 つの典型的系統値 (A 型, B 型, C 型, D 型, E 型) と Q 分類法による適応度の測定結果との関連性を調べる。

⑤不適応異常の諸測度の相互相関の検討 Q 分類法の測定による自己一致度が低く、同時に Q 分類法と Y-G 検査の両方の測定により不適応と判定した被験者に対し、1 ~ 2 週間後に、さらに他の性格検査 CAS (不安テスト) を実施した。ここでは、Y-G 検査の情緒安定性 4 因子 (D: 抑うつ性; C: 回帰性; I: 劣等感; N: 神経質) と CAS 不安テストの 5 因子 ( $Q_3^{(-)}$ : 人格統御力の欠如, または自我感情の発達不全;  $C^{(-)}$ : 自我の弱さ; L: 疑い深さ, またはパラノイド型の不安定性; O: 罪悪感;  $Q_4$ : 欲求不満による緊張, または衝動による緊迫状態) を測度として選び出した。また、他者評定としてこの 9 因子の不適応に関する兆候を記述した 18 項目について、それぞれの調査者の友人・知人あるいは大学の関係者 2 名によって 5 点尺度で評定が行われた。2 人の評定の結果 (18 項目の測定値) は一つの測度の値として合計点が算出された。最後に、不適応に関する Y-G 性格検査の情緒安定性 4 因子 (D, C, I, N) と CAS 不安テストの 5 因子 ( $Q_3^{(-)}$ ,  $C^{(-)}$ , L, O,  $Q_4$ ) と友人や知人 (friends & acquaintances) による他者評価との間の相関係数が算出された。

## 結果

### 1. 自己一致度 (r) と現実自己の適応点の度数分布

まず、現実自己と理想自己のそれぞれで、各項目と項目合計との得点(カテゴリー値)の差を求めた。現実自己と理想自己との一致度(分離度)は相関係数  $r$  の値として得られた。その度数分布を Figure 1 に示した。

自己一致度  $r$  の分布範囲は、理論的には +1.00 から -1.00 までであるが、実際には Figure 1 のように +.73 から -.49 までであった。 $r$  の平均値は .24、標準偏差は 2.68 であった。

次に、現実自己の適応度数を求めた。被験者の不適応点の分布は Figure 2 に示したとおりで、平均不適応点は 9.14 となり、標準偏差は 3.91 であり、68.1% の被験者は不適応点が 9 以下であった。

### 2. 自己一致度 (r) と不適応点との相関

自己一致度 ( $r$ ) は留学生の適応の程度を間接的に示している。つまり、自己一致度が高い者は不適応得点(不適応度)が低く、自己一致度が低い者は不適応得点(不適応度)が高いことが期待される。両者の相関を算出すると、 $r = .61$  であった。このことから、仮説1が検証された。

### 3. 自己一致度及び不適応得点と Y-G 性格検査との関連

Table 2 にあるように、自己一致度及び適応度数の妥当性を検証するために、Y-G 性格検査との関係を調べた。その結果、自己一致度が高いほど、Y-G 検査で情緒安定性が高く社会的適応が良いという判定結果が得られた。逆に自己一致度が低いほど、情緒不安定で社会的不適応が多いという特徴が見られ、Y-G 検査のプロフィール

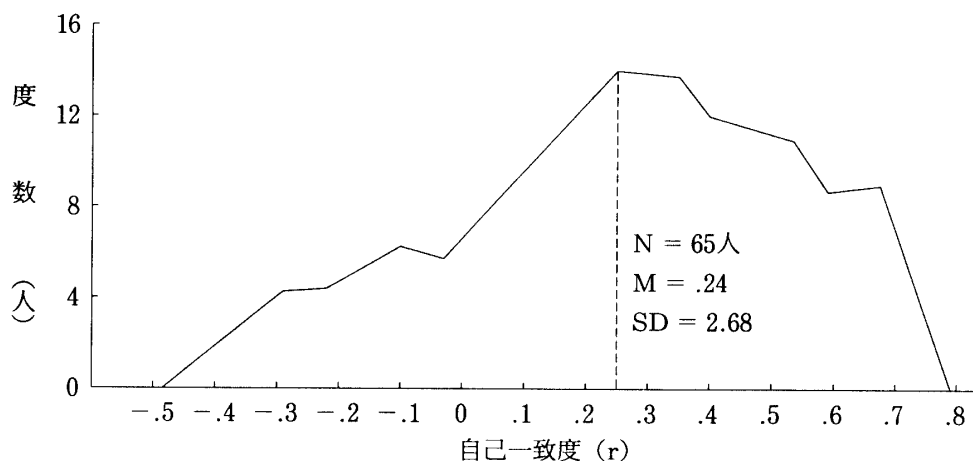


Figure 1. 現実自己と理想自己との一致度 (r) の度数分布

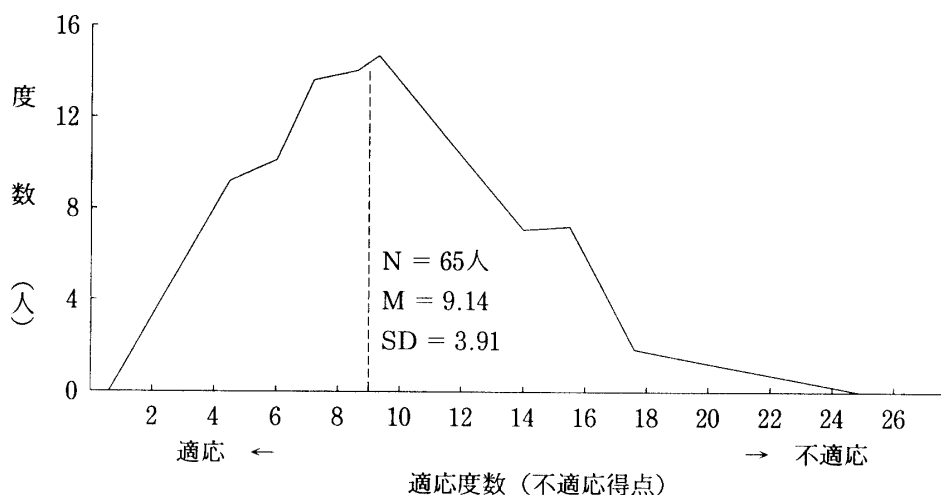


Figure 2. 現実自己の適応度数分布

ル型として左下がり型（E'型）あるいは右寄り型（B'型）に近づいている結果が示された。Table 2では、65人のデータの中で20人のデータを選んで検討した。すなわち、rが.50以上の上位5人、rが-.10以下の5人とrが中間の.50～.05の10人を選んで、自己一致度とY-G検査との関係の代表的な例として示した。

また、自己一致度（r）の得点高群（9名）と低群（6名）の男子留学生に対し、Y-G性格検査のプロフィールでその類型を比較した。ここで、高群とは自己一致度の得点の平均値.50以上の者であり、低群は平均値-.30以下の者である（Table 2を参照）。結果はFigure 3に示した。高群と低群の間には劣等感、神経質、攻撃性、一般的活動性、のんきさ、支配性、社会的外向など因子に有意差がみられた。高群がA'型であるのに対して、低群が左下がりのE'型に近づいている。これらのことから、仮説1が検証された。

#### 4. 不適応に関する諸測度の相互相関

Y-G検査で情緒安定性因子群（D, C, I, N）に不適応を示している留学生（男性6名、女性4名）に対して、CAS不安テストを実施した。それと同時に、これ

らの留学生たちの友人や知人による適応の評定が行われた。諸測度の相互相関を検討した結果をTable 3に示した。各測度の間ではほとんど、領域1（Y-Gの情緒安定性因子群）の内部でも、領域2（CASテストの不安因子群）の内部でも、各領域間でも、有意の相関を示している。また、CASテストの測定と友人や知人の評定との相関に比べて、Y-G検査の測定結果と友人や知人の評定との相関度がやや高い。この結果によって、仮説2はほぼ検証されたといえるが、各尺度の内容によって諸尺度の相関の様子が異なっているし、また、被調査者の数が少ないので、今後さらに追加検討が必要となる。

#### 自己一致度の高い人と低い人の適応像

事例1：女性、28歳、日本滞在期間4年11ヵ月、博士課程在籍

r = .61, 不適応点 = 2, (自己一致度が高い)

Y-G検査の判定結果：情緒安定性 = 安定, 社会適応性 = 適応, 向性(衝動性・活動性・主導性) = 平均

C国のある有名大学を卒業して来日、日本語学校を経て日本の国立大学のマスターコースに進学、現在博士課

Table 2. 自己一致度・不適応点とY-G検査の判定結果との関係

被験者	r	不適応点	プロフィール	情緒・社会・向性の判定
1. ZH	.73	2	CD	安定・適応・平均
2. YC	.69	3	A'	平均・平均・平均
3. CM	.61	2	DA	安定・平均・外向
4. HZ	.57	4	AC	平均・適応・内向
5. LL	.54	5	D	安定・適応・外向
6. XG	.46	6	A''	平均・平均・平均
7. TL	.45	5	CE	安定・平均・内向
8. SZ	.39	7	C'	安定・平均・内向
9. GI	.36	10	AB	平均・不適応・外向
10. ZC	.30	9	A'	平均・平均・平均
11. WX	.27	10	BD	不安定・平均・外向
12. LH	.21	8	A''	平均・平均・平均
13. JX	.18	11	AB	平均・不適応・平均
14. ZZ	.12	11	BD	不安定・平均・内向
15. KW	.07	10	AB	平均・不適応・内向
16. FR	-.14	13	B'	不安定・不適応・外向
17. OM	-.21	12	E'	不安定・不適応・内向
18. ST	-.33	15	AE	不安定・不適応・内向
19. MS	-.41	17	B'	不安定・不適応・外向
20. TH	-.49	21	E'	不安定・不適応・内向

注) 「情緒」では情緒安定性の尺度を指す。

「社会」では社会適応性の尺度を指す。

「向性」では衝動性・活動性・主導性などの性格特性尺度を指す。

Y-G 性格検査プロフィール

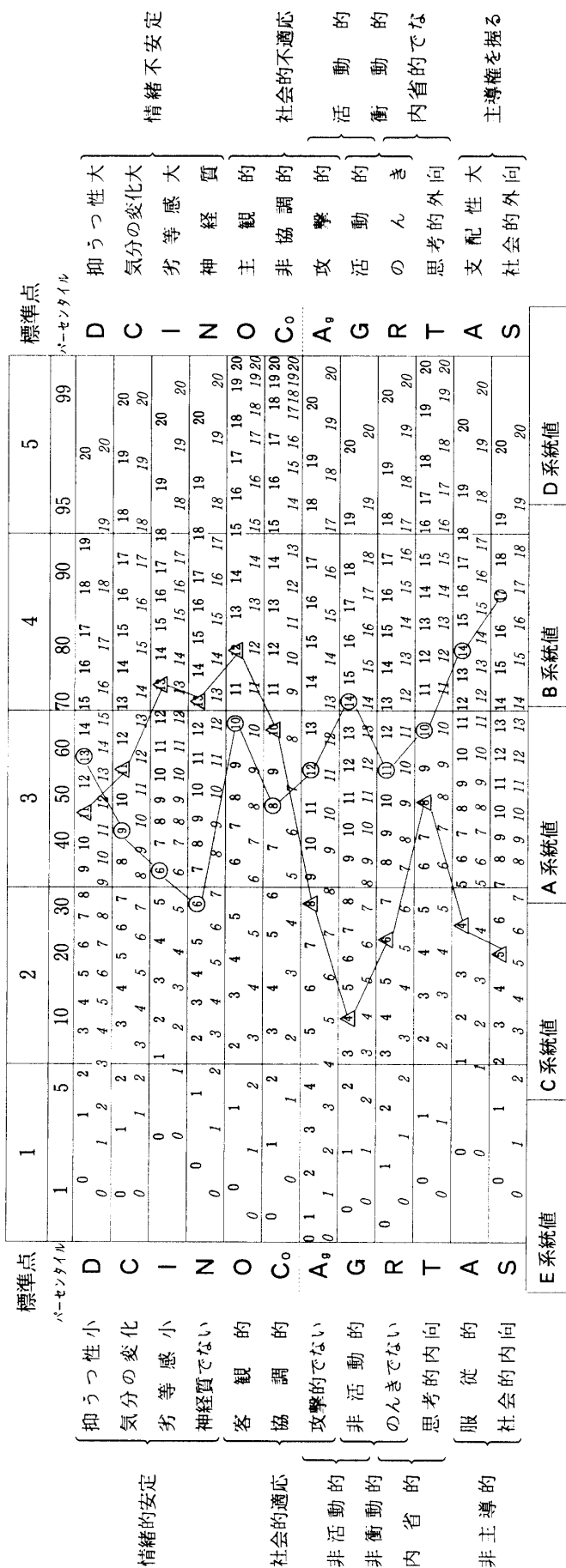


Figure 3. 自己一致度 (r) の得点による高低群の Y-G 検査プロフィールの比較

○——○ 高群 (男子9名)  
△——△ 高群 (男子9名)

Table 3. 情緒の適応異常に関する諸測度の相関 (N = 10)

諸 測 度	Y-G 検査の情緒因子				CAS テストの不安因子					友人や知人の評定
	D	C	I	N	Q <sub>3</sub>	C <sup>(-)</sup>	L	O	Q <sub>4</sub>	
D	(.71)									
C	.47*	(.76)								
I	.63*	.48*	(.69)							
N	.68*	.22	.65*	(.75)						
Q <sub>3</sub>	.33	-.01	.54*	.26	(.73)					
C <sup>(-)</sup>	.51*	.31	.66*	.30	.51*	(.70)				
L	.20	.16	.24	.61*	.43	.27	(.81)			
O	.41	.09	.32	.55*	.18	.60*	.52*	(.75)		
Q <sub>4</sub>	.57*	.39	-.04	.27	.53*	.45*	.44	.50*	(.80)	
友人・知人	.40	.33	.61*	.49*	.34	-.09	.42	.29	.56*	(.65)

注：\*p<.05 (両端テスト)。対角線上の ( ) の内の数字は、Cronbach の係数アルファによって推定された尺度の信頼度である。

程で勉強中。電子関係の先端分野で研究活動をしており、最近、学術論文が国際的に評価され、六月にヨーロッパの学会でその論文を発表した。実は彼女は、博士課程も終わりに近づいていたため、日本での一時的な就職を考えていた。そこで、日本のある大企業G研究所が人材を必要としており、その研究所への就職の話がもちかけられた。その研究所を訪れ責任者と会ってみたところ、研究施設は満点、博士コースは継続し、卒業後は自由な研究を保証する、待遇は文句なしといった具合に、とにかく条件は大変よく、すっかりひきつけられてしまった。しかし、「外国人だといろいろ不便があるので、日本に帰化していただきたい」という条件を聞いて、大変ショックを受けた。

留学生センターに相談に行った。彼女は「私は科学技術の発展のために研究している。なぜ外国人であってはいけないのか」、「日本の女性の地位は低い。自分が日本人になると、いったいどういうものになるのか」と疑問をはきだした。相談の担当者からいろいろアドバイスされたが、最終的には彼女が自分で決めるべきだと強調された。彼女は「科学研究には国境はない」、日本の科学技術に貢献したいが、日本に帰化するつもりはない、G研究所へ改めて話してみると決意した。

彼女は元気を取り戻し、卒業間近には誰よりも研究に頑張り、博士論文作成に取り組むことになった。

事例2：男性、30歳、日本滞在期間4年9ヵ月、大学院研究生

r = -.14, 不適応点 = 13, (自己一致度が低い)

Y-G 検査の判定結果：情緒の安定性 = 不安定, 社会的適応 = 不適応, 向性 (衝動性・活動性・主導性) = 外向  
彼は母国ではA研究所のエリートであり、日本での研

究が思うように進んでいないことなどから、少しノイロゼー気味となった。住んでいた寮の植木を刀で切ったり、留学生室でも「俺は剣豪の宮本武蔵ですよ」といって、机の上にひょいと乗ったり、「てめえは柳生一族のアンポンタンだ」といった奇行があり、留学生カウンセリングをするところに行くように勧められたが、彼は「自分がおかしくない」、「外国人は日本人と違うので、正常か異常か判断することが難しい」といって、行くことを拒否した。

しかし、その後、彼は頭が痛くて、何も集中できないため、頭痛が続いて困るという理由で、留学生相談室を訪れ、検査を依頼した。また、彼の話によると、「自分は母国ではエリートなのに、大学の先生は高校の理科教科書を与え、勉強するように指示した」と自分の困惑について話した。しかし、カウンセラーと話すことができ、しばらくの間に気分が落ちついているようであった。

事例3：女性、29歳、日本滞在期間2年6ヵ月、修士課程在籍

r = .49, 不適応点 = 21, (自己一致度が低い)

Y-G 検査の判定結果：情緒の安定性 = 不安定, 社会的適応 = 不適応向性 (衝動性・活動性・主導性) = 内向

彼女は同じ国の留学生に思いを寄せていたが、かなえられなかったようである。失恋したのが引き金になったのか、精神状態が不安定になった。新学期には大学で常に健康診断が実施される。彼女は其中で、尿検査と胸部エックス線撮影に対して、甚だ羞恥心を覚えた。尿検査は「個人のプライバシーをおかされるのではないかと心配した。また、胸部エックス線撮影については、男女の受診者はその撮影室の入り口の手前で上半身裸にしなければならない。しかし、そこにはカーテンなどの仕切

はいっさいなかった。半裸のまま一列に受診を待っている間、係員により指示が与えられた。男性に一部始終を「見られている」といった強度の不安感と「上半身裸のまま待つこと」という指示の言葉に対する恐怖感がある。「自分がまるで別人になり、どこかに故障のある機械みたいだ。誰かが後ろを見つめる気がする。第二の皮膚とも言うべき衣服が剥ぎ取られてしまうと、すごく傷つけられたという感情が高まった」と述べた。

大学の担当者と相談をした結果、一時帰国・休暇させる事になった。

上述の事例が示すように、自己一致度の高い人は、理想的自己像を持ち、問題を積極的に解決しようという適応姿勢がみられる。それに対して、自己一致度の低い人、すなわち否定的自己概念を持っている人は、挫折、不満によって不安定な心理状態にあり、自己を变形させる、自己の「過剰露呈」への抑制・恐怖などの不適応状態がみられる。

## 考 察

### 1. 異文化適応と「自己概念」

異文化適応とは、ある個人が自分の生まれ育った社会環境から離れて、異なる新たな文化・環境に次第に慣れてゆく過程をいう。適応は一種の主体条件を変容して社会要請の内容に一致せしめるという課題解決の過程である(戸川, 1970)。本研究の留学生たちは、日本における平均滞在期間は31.2ヵ月であった。この滞在時期における留学生が現在の自己をどのように認知しているかということと適応との関係を検討することを中心とした。すなわち、彼らの現在の自己概念は、自分の生まれ育った社会環境の中で測定されたのではなく、異文化環境(留学先国・日本)において文化変容をしている間の自己概念として測定された。

結果は、留学生の自己概念と適応とは密接に関係して

いた。すなわち、自己一致度(現実自己と理想自己の一致度)が高いほど、適応的傾向を示し、自己一致度が低ければ、(異文化)適応度も低くなっていることが示唆された。

しかしながら、この被験者たちのもともと自己概念はどうだったのか、現在の適応や不適応が日本に来てからのことだと断定できるのかが問題である。言い換えれば、現在の自己一致度が高く、適応を示している人たちはもともとの自国でもこの傾向を持っていたのではないかと、逆の場合も同じ傾向を持っていたのではないかと考えられる。ここで異文化移行「過程」という状況をもう少し検討していくことが必要となる。この問題は四つの場合に分けて考えられなければならない。そのことを示した Figure 4 をみてみると、場合 B' と場合 D' は文化移行の後に、自己一致度や適応が良い傾向あるいは不良傾向へ変化するのであるが、問題は場合 A' と場合 C' の場合をどう理解するのか。場合 A' と場合 C' では文化移行の後に自己一致度と適応の状況は変化せず、そのまま移行し、維持するとは考えられない。すなわち、異文化環境における自己一致度と適応の状況は自文化環境における状況と同じでも、その自己概念の中身や適応の内容が異なっていると考えられる(A→A', C→C' と示したのはこのためである)。つまり、自文化環境における自己一致度や適応の状況の良しあしにかかわらず、異文化環境に移行した後、大きく変容した新たな自己概念や適応の内容を示している可能性がある。しかし、この移行はどういう過程なのか、どのような変容が起きていて、変容を左右する要因は一体何であるか、こうした点については本研究のみで結論を見出すことはできない。さらなる別の専門研究を行う必要がある。

本研究の結果、現在の自己一致度の高い人は、適応的であり、逆に自己一致度の低い人は、一般に不安によって適応困難の心理状態にあった。つまり、現実自己と理

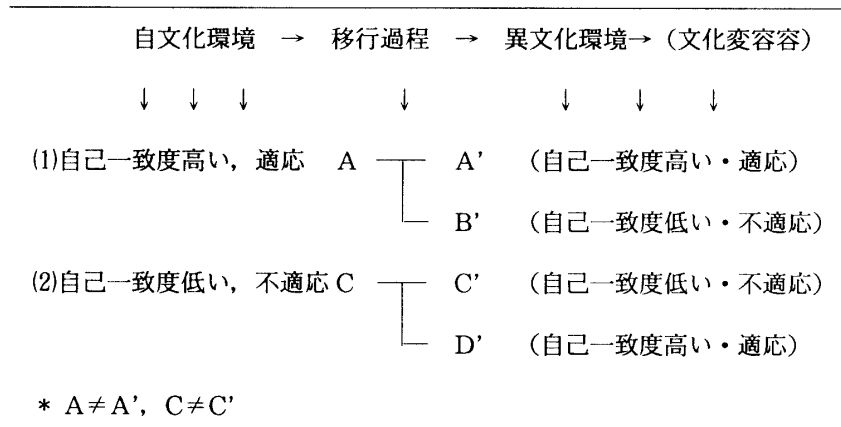


Figure 4. 文化移行の後に自己一致度と適応の状況の変容



想自己との一致度は適応の程度を間接的に示している。これは本研究の仮説1が支持しているといえる。

## 2. 異文化適応の要因となる「自己一致度」

人生にはさまざまな発達の危機とみなしうる諸段階があり、もちろん、留学生には日本の社会・文化環境との関係において、現実的な「自分としての自己」を確立する段階にある。ある発達段階で文化間の移行が生じる場合には、当然のように、前段階における自文化の安定状態の破壊と移行段階における異文化適応を目標とする平衡状態の獲得という過程が同時に生起する。その過程は、しばしば矛盾したものとして自覚され、全体としての人格は、葛藤をもった、非統合的なものとして意識されることになる。留学生の場合には、これが発達の危機と重なっていると理解される。この移行の過程は、人格の統合や自己形成の過程であり、発達の危機を解決する過程は、自我同一性を確立する適応過程であると考えられる。これが、Q分類法による留学生の自己概念の測定において、現実自己と理想自己との一致度（分離度）を操作的に両者の相関係数で示すことができる理由である。

自我心理学の中で、自己一致度は適応機制に重要な影響を与える要因とされているが、それが留学生の異文化適応をも左右する要因となりうるのかどうかについて、検討が必要となってくる。

自己概念を下位概念に分けてみると、①自我同一性（アイデンティティ）②自己評価、自己受容（自己の価値と十全性に対する感情）③理想自己（自分がなりたい、またはなれるはずであると考えている自己像）という3つで構成されている（Allport, 1943）。これらは、留学生の留学目的の達成、自己実現にとって避けられない重要な課題であるが、この中では特に自己一致度が重要といえる。また、ここでの自己一致度とは、自己概念の正確さの指標であり、かつ自己に対する認知の変化の指標である。

本研究は、留学生の自己一致度得点の高い群（.50以上）では、適応の割合も高いのに対し、自己一致度得点の低い群（-.30以下）では、不適応の傾向を示した。しかし、理論的に測定された適応や不適応の割合が、現実生活の中での個人の人格の適応状態と一致するとは限らない。そのため、本研究ではY-Gテスト、他者の評価などを合わせて個々の留学生の適応状態を理解することを試みた。結果は、自己一致度の高い群（.50以上）の留学生は、Y-G検査の結果からみると、性格として情緒安定、社会的に適応あるいは平均の傾向という特徴がみられた。自己一致度得点の低い群（-.30以下）の留学生では、性格として内向的、情緒不安定、社会的に

不適応などの特徴がみられ、Y-G検査のプロフィール型として右寄り型（B'型）や左下がり型（E'型）であることが多かった。これらのことから、留学生が異文化環境においても、その自己一致度と適応の間に正の相関をもつことが明かとなった。

## 3. 留学生の自己成長への心理援助

留学生の異文化適応の過程を実証的に検討するために何らかの指標が必要であり、多くの研究ではこうした指標として、対日イメージ、留学の諸側面、日本社会・文化・教育の側面、または個人的側面、心理的ストレスやソーシャル・サポートの期待と現実（周, 1993）などがとりあげられてきた。しかし、留学生の多くの不適応はその生起するメカニズムが自我同一性の混乱、自我認知の障害などの要因にあるが、これまでの研究ではこの点はほとんど取り上げられていない。

本研究では、自己一致度が低いと測定された留学生男女10名に対して、Y-G性格検査、CAS不安テスト、友人・知人の評価を実施してその人格の把握を試みた。結果として自己一致度の低い者は適応機制が比較的弱く、情緒不安定で社会的に不適応であり、自我発達は未熟で抑圧の防衛機制を用いる傾向があり、自己一致度と適応に関する諸測度の相互相関を有することが明らかにされた。それゆえ、心理的援助やカウンセリングにおいて、留学生の自己概念の状況を知ることは、重要な手掛かりになると指摘したい。なぜなら、一般に適応機制やパーソナリティの変容は、まず対象個体のものの見方、認知の準拠枠の変化として生じ、そして自己概念が変化し、次に行動の変化が生じることが多い（村瀬, 1970）からである。

実際に、留学生はカウンセリング経験をもつことで、自己概念に成長的変容の起こることが知られている（徐, 1997）。本研究においても、一部の留学生たちは、自己概念の測定とY-G検査などの調査を経験し、自己像をみつめたことを機会に、確かな自我同一性を求めて、さらに自らを励ましていることがみられた。彼らの理想自己と現実自己との不均衡がソーシャル・サポートや心理的援助あるいは治療過程の進行に伴って減少し、多くの不適応の改善につながっている。

最後に、本研究における方法論上のいくつかの限界を述べたい。

第1に、本研究のQ分類法、Y-G性格検査などの個人心理測定法は、集団による実施が困難である。そのため、被調査者の人数は限定されているが、さまざまな地域、国の出身の留学生に適用することによって、本研究の結果の一般化が可能かどうかを検討することが必要

である。第2に、本研究のやり方では調査の所要時間が長くなるので、被調査者の負担がかなり大きくなり、彼らが非協力的になることがある。慎重に研究計画を練り、被験者の立場と負担を十分に考慮しなければならない。

第3に、一部の被調査者は現実自己をできるだけ望ましく見せようとする傾向が意識的、無意識的に現われ、自己顕示性によって理想的自己を評定してしまうようなことが少なくなかった。そのため、より有用な知見を得るには、留学生についての面接を行うとともに、適応の“時間”の経過を問題とする縦断的な研究が必要である。

## 文 献

- Adler, P.S. 1975 The transitional experience: An alternative view of culture shock. *Journal of humanistic Psychology*, 15, 13-23.
- Allport, G.W. 1943 The ego in contemporary psychology. *Psychol. Rev.*, 50, 116-122. (北村 晴朗 1962 自我の心理 誠信書房)
- Block, J. 1961 The Q-sort method in personality assessment and psychiatric research. Springfield, Illinois: Charles C. Thomas Pub.
- Church, A.T. 1982 Sojourner adjustment. *Psychological Bulletin*, 91, 540-572.
- Ciaccio, N.V. 1971 A test of Erikson's theory of ego epigenesis. *Developmental Psychology*, 4, 3, 306-311.
- Erikson, E.H. 1959 Identity and the life cycle. *Psychological Issues*, No 1. New York: International Universities Press. (小此木啓吾 訳編 1973 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル— 誠信書房)
- Gullahorn, J.A. & Gullahorn J.E. 1963 An extension of the U-curve hypothesis. *Journal of Social Issues*. 19, 33-47.
- 濱田哲郎 1981 自己概念：Q分類法による自己概念の測定を中心として 遠藤辰雄(編)アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版 Pp.92-109.
- 岩男寿美子・萩原 滋 1988 日本で学ぶ留学生：社会的心理学分析 勁草書房
- 梶田毅一 1988 自己意識の心理学へ 東京大学出版会
- Klineberg, O. & Hull W.F. 1979 At a foreign university: An international study of adaptation and coping. New York: Praeger.
- Lysgaard, S. 1955 Adjustment in a foreign society : Norwegian Fulbright grantees visiting the United States. *International Social Science Bulletin*. 7, 45-51.
- モイヤー康子 1987 文化とストレス：在日外国人留学生を対象とした『文化と人間』の会(編)異文化とのかかわり 川島書店 98-117
- 村瀬孝雄 1970 Rogersの自己理論(佐治守夫編 人格 講座心理学10) 東京大学出版会
- Rogers, C.R. & Dymond, R.F. (Eds.) 1954 *Psychotherapy and personality change*. Chicago; University of Chicago Press. (友田不二男訳編 1967 パーソナリティの変化 ローゼス全集13 岩崎学術出版社 Pp.99-128)
- Schwartz, D.D. 1977 Ego function: psychoanalytic structural theory in Wolman, B.B. (Ed.) *International encyclopedia of psychiatry, Psychology. Psychoanalysis & Neurology*, Vol, 4, New York: Nostrand Reinhold. Pp.256-259.
- Taft, R. 1977 Coping with unfamiliar cultures. In N, Warren (Ed.) *Psychology*, 1. London: Academic Press. 121-153.
- 高井次郎 1989 在日外国人留学生の適応研究の総括 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科— 36, 139-147.
- 戸川行男 1970 適応と欲求 金子書房 Pp.11-79.
- 上原麻子 1988 留学生の異文化適応 広島大学教育学部日本語教育学科・留学生日本語教育(編) 言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究 広島大学教育学部 Pp.111-124.
- 徐 光興 1997 在日留学生の異文化適応における行動障害とその援助 名古屋大学教育学部心理教育相談室紀要『心理臨床』第12巻
- 山本多喜司(代表) 1986 異文化環境への適応に関する環境心理学的研究 昭和60年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 周 玉慧 1993 在日中国人系留学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み 社会心理学研究. 8, 235-245.
- 対馬 忠・辻岡美延・対馬ゆき子 1966 CAS不安診断テスト：性格検査と精神健康の測定尺度 東京心理株式会社
- 辻岡美延 1982 新性格検査法：Y-G性格検査実施・応用・研究手引日本心理テスト研究所 (1997年9月16日 受稿)

ABSTRACT

A Examination of Relation Between Self-Concept  
and Adjustment of Foreign Students Living in Japan

Guangxing Xu

The problems of ego identity and self-concept of foreign students has never been examined. The purpose of this paper is to investigate the relation of self-concept and adjustment of foreign students living in Japan. The data collected by 65 foreign students who completed three types of questionnaires: Q-sort method in personality assessment, Y-G personality test tionnaire and R.B. Cattell's anxiety scale. The results showed several findings: ①The close relationship among the adjustment scale of Q-sort data in self-concept, the adjustment scale of the Y-G personality test and R.B. Cattell's anxiety scale. ②It's reasonable to think that lower self-concept levels to poor adjustment, in contrast, higher levels self-concept to better adjustment by foreign students. ③ These results suggested the importance self-concept in the research on cultural adjustment. results of this study will afford some new perspectives on clounseling and psychotherapy of foreign students in Japan.

key words: foreign students, self-conception, adjustment, interpersonal relation, Q-sort method.